

「天宝の末年」の杜甫と李徴 ― 「山月記」と漢詩の学びを結ぶもの ―

高 芝 麻 子

はじめに

中島敦「山月記」は高等学校の国語の定番教材であり、佐野幹『「山月記」はなぜ国民教材となったか⁽¹⁾』の言葉を借りれば「国民教材」と称すべき短編小説である。教科書に掲載されている以上、当然、「国民教材」としての「山月記」は独立した一編の物語でなければならぬ。だが、そうであると同時に「山月記」は、出典と見なすべき中国古典の作品にかなり忠実に取材した翻案ものという側面と、「古譚」という四編ひとまとまりの作品群のうちの一編という側面をも備えている。前者について言えば、直接的には清代の『唐人説蒼』などに見える「人虎伝」に基づいているが、「人虎伝」は宋代の『太平広記』巻四二七に見える「李徴」（出『宣室志』）などにまで遡ることができる。つまり、「山月記」は唐代に成立した物語に由来する作品であるということになる。後者については、佐野幹が『光

と風と夢』の構成などから、中島敦は「山月記」を独立した作品として考えていたのではなく、「古譚」の中的一篇として考えていた」と指摘しているように、「山月記」の主題は「古譚」の作品群を貫く主題とも密接に関わっていると見なすべきであろう。

また、「山月記」の冒頭部分は見慣れない漢語が多く、高校生にはとりわけ難解で、「国民教材」であるにも関わらず、授業の導入のやりにくさがあるようである（前掲書二四二頁）。その有名な冒頭文を引用しよう。

隴西の李徴は博学才穎、天宝の末年、若くして名を虎榜に連ね、
ついで江南尉に補せられたが、性、狷介、自ら恃むところ頗る
厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしなかった。

確かに引用部は、難解な漢語の意味のみならず、唐代の官僚社会や地理的な知識なしには十全には解しがたい。さらには例えば「天宝」という語について、唐代の年号という指摘にとどめず、中島敦

が「天宝の末年」と特定の時期を指定したことが何を意味しているのかなどについてまで視野に入れながら授業を進めていくことは、非常に困難であろう。だが、それを切り離して「山月記」を読むことはできるのだろうか。小森陽一『 \wedge ゆらぎ \vee の日本文学史』第八章「自己と他者の \wedge ゆらぎ \vee ——中島敦の植民地体験」⁽²⁾は戦後の国語教育の現場での「山月記」の受容について、「古譚」から切り離されたことにより、「山月記」で「問われていた歴史性を隠蔽すること」に繋がったとし、この「天宝」という二文字を取り上げて、以下のように指摘する。

他の三作品（論者注…「古譚」の「山月記」以外の作品を指す）では、兄弟の間での権力闘争、国家と国家、民族と民族の間での戦争が、物語の前景に出ているのだが、『山月記』では「天宝」という年号の背後に、内乱に至る権力闘争が隠されているために、結果として、時代状況から切り離された形で、虎になった詩人李徴の内面の問題だけが議論され続けることになったのである。（二五一頁）

さらに小森は「中島敦が小説を書いた戦争の時代において、はたして、戦後的視点からの「人間性」なるものが、どこにあったのだろうか」（二五二頁）と問いかけ、「山月記」を「詩人李徴の内面の問題」、李徴の「人間性の欠落」に帰着させる読みに疑義を呈している。「古譚」の他の三作品ではきちんと説明されていたその「歴史性」が「山月記」では説明されていないために、現代の読みに反映されていないという小森の指摘は首肯しうるものである。そして、小森は明瞭には言及していないが、恐らく、「中島敦が小説を書いた戦争の時代」には、その「歴史性」が「天宝の末年」と示しただけで、

それ以上の説明がなくとも、当時の読者にはその時代状況が問題なく共有されていたはずである。

「山月記」の「歴史性」が現代の読者に見えづらくなっているのは、変化していく社会の中でやむを得ない側面はある。しかし現実問題として、「山月記」が「国民教材」であり、生徒たちが読みにくさを抱えている以上、そこに何らかの手立てを考えることができればそれに越したことはない。本論では、そのような視点から、「天宝」という時代に着目し、中学高校の教材に取り上げられる漢詩の半数近くが「天宝」を生きた詩人たちの作品であることを踏まえ⁽³⁾、「山月記」と漢詩を結びつけて考えることで、双方の理解を深める可能性について検討したい。

本論は、盛唐詩人の他、実在した袁蓼という人物の経歴などを踏まえ、唐代伝奇「李徴」（以下「李徴」）、清代テキスト『唐人説薈』に見える「人虎伝」（以下「人虎伝」）、中島敦「山月記」（以下「山月記」）にそれぞれ想定される「李徴の生きたかった人生」を検討するという手法を採り、現時点では実践的な授業提案などを含まないことをあらかじめお断りしておきたい。

一 作中に描かれた李徴と袁蓼の人生

冒頭で描かれる李徴の人生の蹟きは、「李徴」「人虎伝」「山月記」において大きな差はない。しかし「山月記」に比べて「李徴」「人虎伝」はいくらか詳しく書かれているのでまずそれを確認したい。

「山月記」の李徴は「天宝の末年」に進士に及第し、江南尉となつたがすぐに辞め、詩作に耽った。そして数年後、貧しさに耐えかねて東に赴き、地方官となり、一年後に虎となつたと説明されてい

る。

「李徴」の場合は、二十歳で地方試験に合格、天宝十載（七五一）春に尚書右丞楊没が知貢挙（試験監督）を務める試験で進士に及第する。数年後に江南尉となり、任期が満了すると隠遁したが、一年余り経ってから貧困のため東方の呉楚に赴き、支援を求め、一年近くして故郷號略に戻る途上で虎になっている。「人虎伝」においても「李徴」とほぼ同じである。ただし、「人虎伝」では李徴が進士に及第した年を天宝十五載とし、知貢挙を尚書右丞楊元とする。

李徴の経歴の書き方を見比べてただけでも、進士及第を「李徴」「人虎伝」ともに「進士の第に登る（登進士第）」と表現しているのを、「山月記」は「名を虎榜に連ね」と表現を変え、あえて「虎」の文字をここで用いる点など、興味深い変更はいくつも見られる。中でも本論において注目したいのは、進士に及第した年を「李徴」では「天宝十載春」、「人虎伝」では「天宝十五載春」、「山月記」では「天宝の末年」としているところである。天宝は玄宗の元号で、十五年間続いた。「山月記」の「天宝の末年」とは天宝の末ごろ、天宝十五載とは限定しないが、天宝十五載に至る数年の間のこととみてよからう。「人虎伝」の「天宝十五載」を「天宝の末年」に書き換えた中島敦の狙いは明確ではないが、天宝が何年まであったかわからない読者にも、天宝年間の終わりごろのことであったと伝わりやすい形に変えたことは注目に値する。

中島敦が李徴の科挙及第を天宝の終わりであるとあえて強調したと考えたとき、そこにどのような意味を見出せるだろうか。天宝について小森陽一は「内乱に至る権力闘争」の時代と指摘しているが、その内乱、つまり安史の乱は天宝十四載十一月に勃発し、十五

載六月に長安が陥落、その月のうちに肅宗が即位して至徳元年に改元されている。つまり、「李徴」では安史の乱勃発の四年半前に進士に及第しているが、「人虎伝」では安史の乱の最中、しかも副首都洛陽が天宝十四載十二月に陥落し、反乱軍に長安が脅かされつつあった時期の及第となる。天宝が「内乱に至る権力闘争」の時代であったのは間違いないが、「人虎伝」はその時代の終焉、内乱に脅かされる長安に李徴の官界の第一歩を設定しているといえる。その「人虎伝」の状況に近い位置に、つまり非常に困難な時代の幕開けの時期に「山月記」の李徴の科挙及第は設定されているのである。

もちろん困難な時代に科挙に及第していても、袁愔のように出世できる者もいる。三作品いずれでも、袁愔は李徴と同じときに科挙に及第し、李徴が虎になった翌年に監察御史として嶺南に赴いており、「李徴」「人虎伝」では作品の最後に兵部侍郎にまで出世したことが明らかにされている。

唐・封演『封氏見聞記』卷三によれば、唐代の科挙官僚のエリートコースには①進士、②校書（秘書省・正九品上）、③畿尉（正九品下）、④監察御史（正八品上）、⑤拾遺（従八品上）、⑥員外郎（従六品上）、⑦中書舍人（正五品上）、⑧中書侍郎（正四品上）というように、定まったルートが想定されていた。封演自身も天宝末年の進士であることから⁴、李徴・袁愔もおおむね同じようなエリートコース観を持っていたと考えていいだろう。袁愔は「李徴」「人虎伝」では最近になって監察御史の列に加えられたと述べていることから、進士及第後に校書を経て、畿尉（長安近郊の地方官）から監察御史に移ったと推測することができる。「李徴」「人虎伝」に最終官歴が軍事を司る役所の副長官である兵部侍郎であったとあるが、兵部侍

郎は正四品下であり、宰相には届かず、想定されたエリートコースのゴールである正四品上の中書侍郎ほどでもないものの、科挙官僚としてはかなり出世した部類に入る。

一方、李徴は科挙及第後に校書などエリートコースのポストを得ることができず、「李徴」「人虎伝」では数年後に、「山月記」では「ついで江南尉に補せられた」とあるのでおそらく及第後遠からぬ時期に、江南尉となっている。江南尉は長江下流域の地方官であり、畿尉ではない。校書になれず江南尉を与えられた段階で、李徴はすでにエリートコースに入れなかったことを理解していたに違いない。

途中で仕官を断念した理由について、「李徴」「人虎伝」においては「跡を卑僚に屈する能はず（不能屈跡卑僚）」とのみ描かれるが、「山月記」においては「下吏となって長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を詩後百年に遺そうとしたのである」と詩名を得たいという動機が加えられ、詩を作ることがより積極的な意味を持つようになっていく。しかしそうであったとしても、三作品の李徴はいずれも政治家として大成することをまずは目指し、挫折したという点は共通する。李徴には特定のモデルを見出すことは難しいが、袁愔にはモデルと見なしうる同時代の人物がいる。次章では、天寶十載あるいは十五載に進士に及第しているながら科挙官僚として一定の成功を収めた実在の袁愔の人生を正史から確認し、李徴が生き残ったかたの人生の一つの形について考えていきたい。

二 唐人から見た李徴の理想と挫折

袁愔には『旧唐書』『新唐書』ともに独立した伝はない。『登科記考』巻九の天寶十五載の項目に進士及第者として袁愔と李徴の名が

見えるが、これは「人虎伝」によっている。『登科記考』によれば天寶十五載の知貢挙は礼部侍郎楊浚⁽⁵⁾で、尚書右丞楊浚（「李徴」とも尚書右丞楊元（「人虎伝」）とも異なっており、「李徴」や「人虎伝」の記載をそのまま史実の袁愔の科挙及第の記録と見なすことは難しい。本論では仮に、唐代の本来のテキストの形を残している可能性がより高い「李徴」に基づき、天寶十載（七五一）進士に及第したと想定して、袁愔の経歴の推定を試みたい。

『旧唐書』巻一五六には、広徳年間（七六三から七六四）に袁晁が台州で起こした反乱に対し、御史中丞（正五品上）の袁愔が鎮圧に貢献したとの記事が見え、功績により常州別駕（従四品下）と浙西都知兵馬使が加えられたとある⁽⁶⁾。唐・独孤及がその功績を祝して贈った「袁愔の賊を破るを賀するの表（賀袁愔破賊表）」⁽⁷⁾には、袁愔の官名として御史中丞の他、河南副元帥李光弼の行軍司馬と、太子右庶子（正四品上）とが連ねられている。

袁愔が兵部侍郎（正四品下）であったことは、『旧唐書』巻一二二、大暦十二年（七七七）の記事に列挙された、元宰相の元載や王縉（王維の弟）の罪の取り調べの担当者の中に「兵部侍郎袁愔」が含まれることから確認できる。同巻一三二には大暦十四年、太廟の祭祀を巡り、兵部侍郎袁愔が顔真卿と対立したともあり、正史には管見の限りこれ以降の袁愔に関わる記録はない。

『全唐詩』には袁愔の詩として「喜陸侍御破石埭草寇東峰亭賦」詩と「東峰亭同劉太真各賦一物得垂澗藤」詩⁽⁸⁾の二首が採録されている。この二首はいずれも宣州（現在の安徽省南東部）の水西寺東峰亭の宴で作られたものである。

「喜陸侍御破石埭草寇東峰亭賦」詩は陸侍御が石埭の草寇（反乱

軍)を破った功績を喜ぶとの詩題で、王緯、蘇寓、崔何、郭澹に同題の詩が残る。大暦元年(七六六)、宣州・石埭城(現在の安徽省)の戦いで反乱軍の将である方清が死に、反乱が鎮圧されていることから、この詩はその祝勝の宴での作であろう。『旧唐書』卷一五〇には李自良が袁倬に従って饒州・陳莊の反乱鎮圧に加わり、功績を挙げたとあり、松井秀一「八世紀中葉頃の江淮の叛乱——袁晁の叛乱を中心として——」⁽⁹⁾によれば方清の反乱と陳莊の反乱はほぼ同時期であるので、袁倬は袁晁の反乱が鎮圧された七六四年以降も陳莊の反乱の制圧に関わるなど、江淮の反乱鎮圧に関わり、その人的ネットワークの中にいたようである。

松井の前掲論文には、安史の乱が鎮圧された広徳元年(七六三)以降、「唐王朝は漸く全力を傾けて江淮の農民反乱の剿滅に乗り出す事が出来た」、「しかも討伐軍の将帥は、李芄・張伯儀・袁倬・鮑防等当代一流の人物で」あったとし、江淮の反乱が数年のうちに速やかに鎮圧されたことを指摘する。唐王朝から反乱鎮圧の重責を任せられた「当代一流の人物」であり、最終的に兵部侍郎にまで出世した袁倬は、軍務に長じた人物であったとみていいだろう。

天寶十載(七五一)に進士に及第したという仮定に大過がなければ、七六三年にすでに御史中丞(正五品上)を拝命している袁倬の官歴は非常に順調なものである。「山月記」が相応に史実を踏まえていると考えれば、史書には記録が見えないが、袁倬は校書(秘書省・正九品上)、畿尉(正九品下)を経て、数年のうちに監察御史(正八品上)となり、実際に嶺南に遣わされていた可能性もある。詩人としても有名な錢起も天寶十載の進士であるが、知貢挙に高く評価され上位で合格して、初任で校書郎(正九品上)を授かっている。

その後、蜀に派遣された後、考功郎中(吏部・從五品上)に除せられて(10)など、若い時期の錢起は天寶十載及第者の順調な官途の好例であろう。

だが、進士に合格すれば誰もがエリートコースに乗れるわけではない。そもそも当時は科挙出身者をはじめとする官吏候補に対してポストが足りない状況にあり、選人の資格を得ても、多くの場合しばらくは官を与えられないのを待つ期間があった。後述するが杜甫は天寶十載に「三大礼賦」という作品を献上し、玄宗に認められて集賢院の待制となり、翌年に中書試を受けて合格し、ようやく官吏候補となった。集賢院待制とは集賢院に待機するのが役目の、実質的には仕事がない立場である。当時は一般に待機期間が三年あり、実際に官の内示があったのは天寶十四載十月になってからであった⁽¹¹⁾。天寶十四載十一月に安史の乱が勃発し、おそらくはその官に就かずに終わっている。「李徴」「人虎伝」の李徴が、進士に及第してから江南尉を与えられるまで数年後であったとあるのは、この待機期間によるものであろう。

ただし、官を得る妨げは待機期間だけではない。天寶十三載の進士である元結は、知貢挙に高く評価され、制科(皇帝の行う特別試験)に推挙されるほどであったが、安史の乱の混乱の中で官に就けずにいた。のちに肅宗に金吾兵曹参軍(正八品下)を与えられたが⁽¹²⁾、それまでに及第から少なくとも二年は経過している。

このように、慢性的なポストの不足に起因する待選に加え、安史の乱に起因する政治的混乱が生じたことで、おそらく天寶末の進士及第者の多くは、及第から数年の間、非常に不遇であったのではないかと考えられる。先述の袁倬「東峰亭同劉太真各賦一物得垂澗藤」

詩に名に見える劉太真は、『旧唐書』に伝が立つほどの人物であるが、その伝によれば袁儻とほぼ同時期「天宝末」に進士に及第しているものの、彼の官歴は大暦年間（七六六から七七九）に淮南節度使陳少游の掌書記から始まる⁽¹³⁾。松井秀一が「当代一流の人物」として袁儻とともに名を挙げる鮑防も、「天宝末」に進士に及第したが、『旧唐書』の伝に見える彼の官歴は浙東觀察使薛兼訓の幕僚からである⁽¹⁴⁾。彼らは先に示したエリートコースには乗れなかったが、運よく地方の軍務の中で頭角を現すことができたのである。当然、エリートコースに乗れず、地方で頭角を現すこともできなかった者も多くいるに違いない。

「李徴」が成立した中唐のころには、自身も士大夫である読者は盛唐末（天宝末）から中唐初期にかけての、多くの進士及第者が陥った窮状を知悉していたであろう。一方にはエリートコースに乗れる者もあり、一方には待機期間と反乱の影響で官を得損ね、あるいは意に染まぬ低い官しか得られなかった者、思うに任せぬ官途から脱落していった者もいたはずである。当時の読者にとって李徴の官途への期待と失望は想像しやすいものであったに違いない。

天宝十載以降に進士に及第した者の中にもこれだけの格差が生じるのであるが、李徴の挫折に関してはもう一つ重要な要素を加味する必要がある。それは「李徴」「人虎伝」に共通し、「山月記」では除かれた「皇族子」という李徴の出自である。

皇族出身とはいえ皇帝との血縁関係は非常に薄く、立身出世に直接結びつくようなものではなかったため、科挙を受けたのであろうが、そうであったとしても、李徴からすれば自身の血筋は誇りであったことだろうし、血筋により皇帝に目をかけられることへの一抹

の期待はあったかもしれない。そのような期待と結びつく存在として、同時代の「皇族子」である李勉を紹介したい。

安史の乱勃発以降に活躍した「皇族子」李勉（七一七から七八八）は、学問も人柄も非常に優れており、安史の乱のさなか、肅宗のもとで監察御史となっている。中央と地方の官を行き来し、先述の江淮の反乱にも大きな功績を挙げ、御史大夫や檢校吏部尚書を歴任し、死後、人臣としての最高位正一品である太傅を追贈されている。

政治家として目覚ましい活躍をし、高く評価された李勉であるが、安史の乱に際し興味深い逸話がある。首都長安を反乱軍に奪われ、肅宗が靈武（現在の寧夏回族自治区靈武県）にいた至徳元年（七五六）、朝廷の秩序は乱れ、皇帝に対する尊崇が薄らぐ中、肅宗に背を向けて談笑していた將軍管崇嗣を、監察御史（正八品上）であった李勉が糾弾したことがあった。罪に問われた管崇嗣を肅宗は赦免したが、そのとき肅宗は「李勉のおかげで皇帝がいかに尊いものであるか理解できた」と述べ、李勉を司膳員外郎（従六品上）に取り立てている⁽¹⁵⁾。皇帝の威光を取り戻すべく將軍を糾弾して肅宗を感じさせ、反乱の鎮圧に功を挙げて王朝の安定に貢献した李勉の生き方は、皇帝を輔弼する「皇族子」の面目躍如といえよう。しかし李勉の抜擢は、唐王朝の權威が失墜し、皇帝すらないがしろにされかねない時代ならではの美談であり、実際には李徴を含めた多くの「皇族子」にとって、当時は生きづらい時代であっただろう。

李徴と同時代に生き、自身の才能で政治家として出世した「皇族子」は李勉だけではないが、世に名を残すことができないまま終わった「皇族子」は成功した者たちよりもはるかに多いだろう。李徴は多くの名も無き「皇族子」の一人に過ぎないのである。しかしだ

からこそ、唐代に「李徴」を読んだ人々は、「皇族子」という李徴の出自から、李徴の挫折と失望とをより深く感じ取ることとなったのではないか。

このように、「李徴」が成立した中唐ごろの人々にとって、「皇族子」でありながら進士及第後数年の待機を経て江南尉しか与えられなかったという李徴の処遇が、いかに彼の自負を傷つけたかは説明するまでもない自明の状況であろう。さらには、天宝十載の進士及第者である李徴が官を与えられるまでに数年を要したのであれば、彼の官途に安史の乱とそれに伴う社会的・経済的混乱が影を落とすことも、唐人にとっては自明のことであつたに違いない。同時代人々には自明であるがゆえに描かれなかった期待と挫折は、しかし「人虎伝」「山月記」と変化していく中で自明のものではなくなり、生々しさを失っていったはずである。だが、この物語は李徴の挫折がなくては始まらない。必ず李徴の挫折が読者に理解されなければならぬ。では同時代人に共有された生々しさを失った時代に描かれた李徴の挫折はどう変化したのだろうか。そのような視点から、次章では「山月記」に見える李徴の期待と失望について考えてみたい。

三 「山月記」読者における李徴の理想と挫折

「山月記」は盛唐から中唐へと変化していく社会を時代背景とした物語である。「はじめに」に引いた小森の指摘にあるように、「古譚」は歴史を踏まえた物語群であり、他の物語では史実が物語の中ではっきりと語られている。「山月記」においても「天宝」という年号の背後」を理解する必要があるとの小森の想定は卓見であろう。

だが、果たしてそこで読み取るべき歴史背景が小森の述べるような「内乱に至る権力闘争」であつたかどうかについては検討の余地がある。

前章では、唐人が李徴の挫折を想像する上で、着任の遅さや「皇族子」への言及が重要な意味を持つていた可能性を指摘した。ところがその二点は「山月記」においては見られない。それに代わり前面に押し出されてくるのは詩人として名を成したいという、李徴の悲願である。「下吏となつて長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺そうとした」李徴は、「詩人に成りそこなつて虎になつた哀れな男」であることを自覚しながら、「こんなあさましい身と成り果てた今でも、己は、己の詩集が長安風流人士の机の上に置かれていた様を、夢に見る」と語る。

唐代には詩人は職業ではなく、詩は士大夫の誰もが嗜むものであつたが、確かに詩に巧みであることは名声につながり、詩によつて後世に名を遺すことも可能であつた。実際、現代に広く名を知られる唐人の多くは詩人として名を遺した者たちである。「山月記」において中島敦が、自身の漢籍への深い造詣に基づき、唐王朝の権力闘争や安史の乱の混乱ではなく、李徴の葛藤として、詩家として名を遺すことへの執着を掘り下げて描いた背景にも、このような天宝のイメージがあることを想定できるのではないだろうか。つまり、中島敦にとつての天宝が詩人たちの時代であつたからこそ、李徴の挫折を詩人としての挫折に変化させたのではないか。「天宝」の末、つまり安史の乱前後の時代は、李白・王維・杜甫ら有名な詩人たちが生きていた時代であり、かつ、白居易「長恨歌」で描かれる楊貴妃の死もまさしく天宝最後の年のできごとである。おそらく当時の読

者には「天宝」の語から天宝の詩人たちを想起した者も多くいたであろう。

先述した通り、杜甫は天宝十載に文学作品「三大礼賦」を献上し、玄宗に認められて集賢院待制となった。その後の杜甫の人生を『杜甫全詩訳注(四)』の「杜甫年譜」に従って簡潔にまとめたい。なお、「用」に挙げられた教科書に見える杜甫の詩である。

天宝十載 集賢院待制となる

天宝十一載 選人となる

天宝十四載まで様々な有力者に引き立てを願う詩を贈る

天宝十四載 同州馮翊郡河西県（現在の陝西省渭南市合陽県）の

尉を授けられるが辞退し、右衛率府兵曹参軍（従八品下）を授けられる

奉先（現在の陝西省蒲城県）に疎開している家族のもとに赴く

十一月、安史の乱勃発

天宝十五載・至徳元年

家族を連れて鄜州（現在の陝西省富県）に疎開

六月、長安陥落

反乱軍に捕らえられ、单身長安に連行される

※八月、「月夜」詩を作る

至徳二年 ※春、「春望」詩を作る

四月、長安を脱出し鳳翔の肅宗のもとへ至る

五月、左拾遺（従八品上）を授けられるも、長安奪還

戦の敗北を咎められた元宰相房琯を庇い、肅宗の逆鱗に触れる

十月、長安が奪還され、朝廷は長安に戻る

至徳三年・乾元元年

六月、房琯派が一斉に左遷され、杜甫も華州（現在の陝西省渭南市華州）の司功参軍に左遷される

乾元二年 ※春、「石豪吏」詩を作る

七月、華州司功参軍を辞職または罷免

家族とともに秦州に向かう

※秋、「月夜憶舍弟」詩を作る

以降、杜甫は、旅と定住とを繰り返しながら、七七〇年に五十九歳で生涯を終えるまで実際に官に就くことはなかった。

「三大礼賦」を玄宗に認められた天宝十載の時点で杜甫は四十歳であるので、若くして進士に及第した李徴とは世代的に異なっているが、「天宝の末年」ごろに官吏候補となったという点では軌を一にする。さらには官途に就いたものの、地方官の職に満足できず、安史の乱のさなかに職を擲ち、それ以降、官職に就かなかつたという点、詩を作り続けたという点でも一致する。「山月記」における李徴が官途に失望して後、詩人を志したと描かれるとき、中島敦の脳裏には、天宝の末ごろに政治家の第一歩を踏み出しながら、激動する時代の中で思うに任せず、詩の中に苦しみを詠い続けた詩人たちが、例えば杜甫などへの連想があったのではないだろうか。

李徴は才能を持ちながら、詩人に成りそこなつた男であつたが、後世では高い評価を受ける杜甫も同時代的においては詩人としてさほど高い評価を受けていたわけではなかつた。杜甫の詩集は杜甫の

死の直後にはある程度長江流域に流布していたとされており⁽¹⁶⁾、杜甫の生前に「長安風流人士の机の上に置かれている」ということもありえないことではなかったが、詩によって高い評価を得た同時代の詩人として、李徴が「このようになりたい」という憧れを抱くとすれば、それは杜甫よりもむしろ李白や王維であっただろう。

李白は七〇一年ごろの生まれである。科挙は受けなかったようで、若いころ蜀の地を旅立ってからはほとんど定住することなく各地を巡り、時の宰相である賀知章らの引き立てを得て、天宝元年(七四二)、玄宗に仕えることとなった。意気投合して酒を酌み交わした宰相賀知章は李白を「謫仙」と評した。もともと仙人であったが罪を犯して地上に貶とされたかのような、類まれなる才能を備えた、しかし地上の規範からは大いに逸脱した人物というような評価であろう。玄宗にもその才能を愛され、翰林供奉という官を与えられる。これは皇帝らの求めに応じて詩文を献上する官であった。政治家としての手腕を揮うつもりであった李白としては納得がいかない役目であったかもしれないが、玄宗が評価したのは李白の詩文の才能だけであつたのだろう。周囲との軋轢も大きく、本人も嫌気がさしたものが、李白は一年余りで長安を離れ、また旅の生活に戻っていくことになる。

王維も李白と同じころに生まれている。王維は七三一年ごろ進士に及第して、紆余曲折を経て給事中(正五品上)にまで出世した人物であるが、若いころから詩人としても名声を博していた。『旧唐書』に見える王維の伝によれば、諸王や駙馬(皇帝の婿)をはじめとする当時の有力者たちは王維やその兄弟の訪問を大いに喜び、寧王(玄宗の兄)や薛王(玄宗の甥)は王維を師であり友であるように敬つ

たという⁽¹⁷⁾。また代宗(在位七六二から七七九)は宰相王縉(王維の弟)に対し、王維は天宝を代表する詩人であると称え、いくらかでも王維の作品を持つているなら献上せよと命じている⁽¹⁸⁾。

孟浩然が王維、李白より十歳ほど年上であるが、科挙などを受験しなかった、非常に自由な人物のようである。李白に非常に尊敬されており⁽¹⁹⁾、王維らとも友人であった。その孟浩然が四十歳のとき、王維が役所内に孟浩然を招き入れたことがある。そのときたま玄宗が役所を訪れ、王維は孟浩然が来ていることを玄宗に告げるところ、噂を聞いたことがあるが会ったことがない、かしこまらずに出てまいれとお目通りが許され、自身の詩を披露するよう命じられている⁽²⁰⁾。そのとき披露した詩が玄宗の気に入らず、彼は仕官の機会を逃すのであるが、ここでも詩の才能によって皇帝に知られ、詩を披露することで官途が開ける可能性があつたことが窺える。

このように、天宝の前半までには、優れた詩の才能を持つ者たちが、その才能によって有力者たちに愛され、もてはやされていたこと、李白や孟浩然のように詩人としての名声によって皇帝にお目通りが許され、場合によっては仕官の道も開けることが確認できる。

図1は孟浩然、王維、李白、杜甫、白居易の生没年に安史の乱を重ねたものである。

王維や李白は活躍時期が早いことから開元天宝の栄華を満喫し、その時代の作品も多く残るのに対し、杜甫はその人生においてこれからというタイミングで安史の乱に遭遇し、彼の代表作の大半は安史の乱勃発以降(天宝以降)のものである。また、中唐・白居易「長恨歌」などにも詠われる楊貴妃の死は天宝十五載のことであり、安史の乱による泰平の喪失を示す象徴的な出来事である。詩に基づい

て李徴の生きた時代を想像したときやはり天宝末が分水嶺となっているのである。

図1 安史の乱と盛唐中唐詩人の生涯

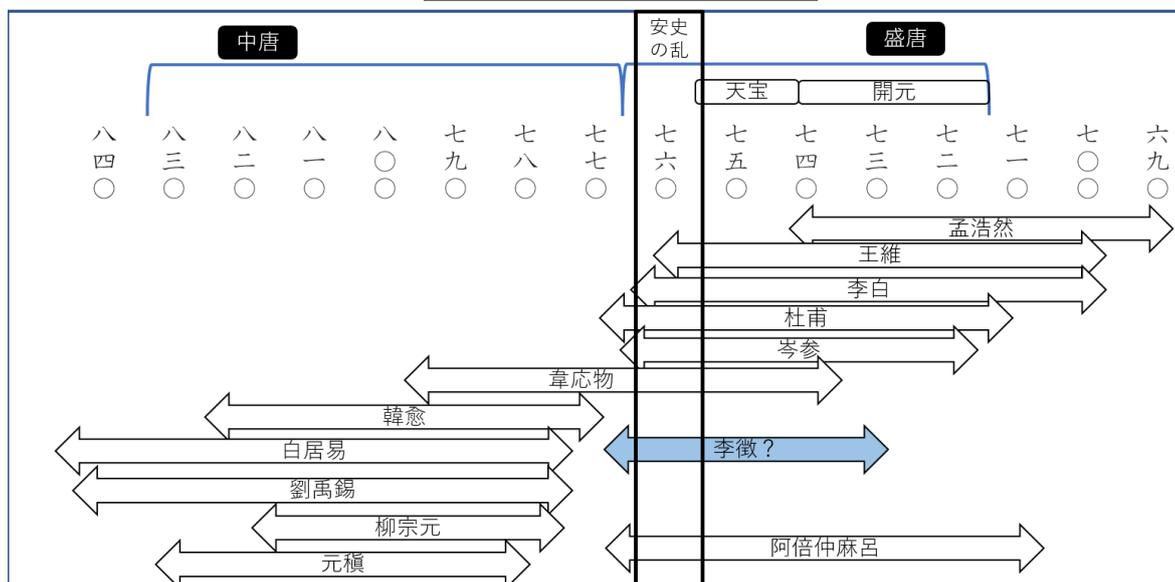


図1には作品から推定される李徴の生没年を添えてある。天宝の末に若くして科挙に及第した李徴は、一世代上の王維や李白の輝かしい詩人としての名声に憧れたとしても、それが可能であった時代はすでに過去のものとなっていた。安史の乱のさなかの不安定な社会において、杜甫ら詩人たちはその苦しみを詠い、報われない不遇を嘆き続けている。安史の乱の勃発する「天宝の末年」に科挙及第を設定された「山月記」の李徴が、詩人としての苦悩を背負った存在となるのは、このような「天宝」のイメージを背景にしていると考えればわかりやすい。

「山月記」の時代背景には当然小森の述べるような「内乱に至る権力闘争」は包含されているが、少なくとも「天宝の末年」の語によって中島が想定し、昭和二十年代当時の「山月記」の読者層に直接的に喚起されたのは、繁栄を極めた時代が一転し、内乱によって生じる様々な社会的・経済的混乱の不条理に人々ことに詩人たちが翻弄された時代の印象だったのでないだろうか。それが自身も戦争の時代に生き、小説を書き、漢詩を作りながら、文学者として名を死後百年に遺した中島敦の自意識とどのように関わるかは本論では措く。しかし、唐代伝奇「李徴」や清代「人虎伝」にはない、李徴の詩への執着が「山月記」において独自に掘り下げられていることは、注目すべきことであろう。

おわりに

第三章で論じてきたように「山月記」の「天宝の末年」を実在する詩人の苦悩を踏まえて理解するとき、教材としての「山月記」は、

李白や杜甫など天宝年間の作品を中心とする漢詩教材と関連付けて考えることができる。

王維、李白、杜甫、白居易の教科書に載る作品のうち、明確に安史の乱が影を落としているものは、杜甫の詩と白居易「長恨歌」のみである(21)。早熟な詩人であった王維や李白と晩成の詩人であった杜甫の年齢差は十歳ほどしかないが、その代表作に見える安史の乱の影響の多寡は、教科書採録の詩にも如実に反映されている。さらにいえば、百人一首にも採られている阿倍仲麻呂は、王維や李白と同世代で交流もあり、玄宗からも気に入られていた。阿倍仲麻呂も盛唐の華やかな時代から安史の乱の過酷な時代までを、唐の地で生き抜いた李徴よりやや世代が上の同時代人なのである。

「山月記」と漢詩は、現代文と古典という切り離されたジャンルの教材であり、結びつけて捉える試みは多くは行われていないと思われる(22)。しかし李徴と袁俊が生きた時代を知り、李徴の挫折の背景にあるものを知るとは、「山月記」の読みを深めていく一つの手だてとなるはずである。同時に、「山月記」に中島敦が描き出そうとした李徴たち生々しい人間の営みが、実在の唐代詩人の人生を具体的に思い描く手がかりを、生徒たちに与えるものであるかもしれない。何より、この「天宝の末年」というキーワードにより、全く異なる教材が結びついていくことは、生徒たちに新鮮な驚きを与えるのではないか。

以上に、李徴の人生を、唐代の人々がどのように想像したか、中島敦が「山月記」にどのように描こうとし、当時の読者がどのようなように想像したかについて、李徴の科挙及第の時期から論じた。そして、唐代においては安史の乱で翻弄された者たちの官途の困難が中心的

に想像されたであろうことに対し、「山月記」においては葛藤を詩に焦点化したことで杜甫ら詩人たちの人生と重ね合わされたのではないかと指摘してきた。この前提が成り立つのであれば、「山月記」と漢詩を結び付けて学ぶことは双方の理解を深める上で有効であろう。

本論では「山月記」と漢詩を結び付けて学ぶという指針の提案にとどまっておらず、具体的な授業の提案にまでは至らなかった。異なる教材を結び付けて、より面白い授業を作り出していくためにどうしたらいいかについては今後の課題としていきたい。

注

- (1) 大修館書店、二〇一三年。
- (2) 日本放送出版協会、一九九八年。
- (3) 中川論「高等学校「古典・漢文」教材としての中国古典詩の活用」(『教職課程センター紀要』二号、二〇一七年)によれば、国語総合(教育出版、三省堂、第一学習社、大修館、筑摩書房)、古典または古典B(教育出版、三省堂、第一学習社、東京書籍)の教科書に見える全八十二首の漢詩のうち、天宝年間前後の詩(盛唐詩)は三十七首にのぼる。
- (4) 『新唐書』巻「封演『古今年号録』」一巻、天宝末進士第」とある。
- (5) 『登科記考』によれば天宝十載、十一載の知貢挙は兵部侍郎李麟であり、礼部侍郎楊浚が知貢挙であったのは天宝十二載から十五載となっている。
- (6) 『旧唐書』巻一五六「広徳中、草賊袁晁起乱台州、連結郡県、積衆二十万、尽有浙江之地。御史中丞袁俊東討、奏棲曜与李長為偏將、聯日十余戰、生擒袁晁、收復郡邑十六、授常州別駕、浙西都知兵馬使。」
- (7) 『全唐文』卷三八四「臣等伏見、河南副元帥行軍司馬、太子右庶子、兼

御史中丞袁倬露布奏。」

(8) 『全唐詩』に「東峰亭各賦一物」など同時の作と思われる詩題の詩を残すのは李岑、劉太真、王緯、袁邕、蘇寓、崔何、郭澹、高倬の八名である。

また、北宋・梅堯臣が袁倬を加えた九名の詩を踏まえ、「擬水西寺東峰亭九詠」という九首の連作を作っていることから、袁倬らの詩が同時の作であると後世見なされていたことが窺える。高倬は前述の独孤及「賀袁倬破賊表」にも名が見える。

(9) 『北大史学』二号、一九五四年。

(10) 『唐才子伝』巻二「錢起、字仲文吳興人。天宝十年李巨卿榜及第、少聰敏、承鄉曲之譽。(中略)遂擢置高第、釈褐、授校書郎。嘗採箭竹奉使入蜀、除考功郎中。」

(11) 下定雅弘・松原朗編『杜甫全詩訳注(四)』(講談社、二〇一六年)の「杜甫年譜」(古川末喜執筆)による。

(12) 『唐才子伝』巻三「少不羈弱冠始折節説書天宝十三年進士。礼部侍郎楊浚見其文曰、一第愚子耳。遂擢高品、後举制科。会天下乱沈浮人間、蘇源明薦於肅宗授右金吾兵曹。累遷御史、『新唐書』巻一四三の伝にもほぼ同文の記事が見えるが科挙の及第年については「天宝十二載」に作る。

(13) 『旧唐書』巻一三七「天宝末举進士。大曆中、為淮南節度使陳少遊掌書記。」

(14) 『旧唐書』巻一四六「天宝末举進士、為浙東觀察使薛兼訓從事。」なお『唐才子伝』巻三の鮑防項は天宝十二載の進士であるとする(天宝十二年楊伊儂榜進士)。

(15) 『旧唐書』巻三四によれば天宝十一載から至徳二載までの間、膳部は司膳と改称しており、膳部員外郎は同巻四三によれば従六品上。

(16) 『錢注杜詩』附録に引く唐・樊晃「杜工部小集序」の「文集六十卷、行

于江漢之南」に拠る。長谷部剛は『杜甫詩文集の形成に関する文献学的研究』(関西大学出版部、二〇一九年)第一章「東大における杜甫詩集の集成と流伝」によればこの序の成立は大曆五、六年(七七〇、七七一)であり、長谷部は大曆五年に没した杜甫が生前に自身で詩集を編纂した可能性を指摘している。

(17) 『旧唐書』巻一九〇「文苑伝下」「維以詩名盛於開元、天宝間、昆仲宦遊兩都。凡諸王駙馬豪右貴勢之門、無不扞席迎之。寧王、薛王待之如師友。」

(18) 『旧唐書』巻一九〇「文苑伝下」「代宗時、縉為宰相、代宗好文、常謂縉曰、卿之伯氏、天寶中詩名冠代、朕嘗於諸王座聞其樂章。今有多少文集、卿可進來。」

(19) 例えば唐・李白「贈孟浩然」詩(『唐詩三百首』)の冒頭は「吾愛孟夫子」(私は孟先生が大好きである)から始まる。

(20) 『新唐書』巻二〇三「文芸伝下」「維私邀入内署、俄而玄宗至、浩然匿牀下、維以美對、帝喜曰朕聞其人而未見也、何懼而匿。詔浩然出。帝問其詩、浩然再拜、自誦所為。」

(21) 唐・李白「早發白帝城」詩は安史の乱下の永王の乱に加わった李白が、流謫の途上で恩赦を受けたときの詩であるとの説が有力であるが、必ずしも確定できず、李白は乱に言及していないことから、本論では措くこととする。なお掲載詩のデータは中川氏の注(3)論文による。

(22) ただし「人虎伝」を漢文教材として、あるいは「山月記」の補助教材として掲載し、漢文「人虎伝」と「山月記」を関連付けて学習させる教科書はある。

(たかしば あさこ／横浜国立大学准教授)